

社会福祉法人八つ鹿会 身体拘束適正化に関する指針

1 基本的考え方

身体拘束は、利用者の生活の自由を制限する事であり、利用者の尊厳ある生活を阻むものです。当法人では、いずれの場所においても利用者の尊厳と主体性を尊重し、拘束を安易に正当化することなく職員一人ひとりが身体的・精神的弊害を理解し、拘束廃止に向けた意識をもち、身体拘束をしない支援の実施に努めます。

(1) 障害者虐待防止法の身体拘束廃止の規定

サービス提供にあたっては、当該利用者又は他の利用者などの生命又は身体を保護するため緊急やむを得ない場合を除き、身体拘束その他の利用者の行動を制限する行為は禁止されています。

(2) 緊急・やむを得ない場合の例外三原則

利用者個々の心身の状況を勘案し、疾病・障害を理解した上で身体拘束を行わない支援を提供することが原則です。しかしながら以下の3つの要素のすべてを満たす状態にある場合は、必要最低限の身体拘束を行う事があります。

- ① 切迫性…利用者本人または他の利用者の生命又は身体が危険にさらされる可能性が著しく高いこと
- ② 非代替性…身体拘束その他の行動制限を行う以外に代替する支援方法がないこと。
- ③ 一時性…身体拘束その他の行動制限が一時的なものであること。

*身体拘束を行う場合には、以上の3つの要件をすべて満たすことが必要です。

2 身体拘束適正化に向けての基本方針

(1) やむを得ず身体拘束を行う場合

本人又は他の利用者の生命又は身体を保護するための措置として緊急やむを得ず身体拘束を行う場合は、身体拘束適正化委員会を中心に十分に検討を行い、身体拘束による心身の損害よりも、拘束をしないリスクの方が高い場合で、切迫性、非代替性、一時性の3要件の全てを満たした場合のみ、本人・家族への説明をし同意を得て行います。

(2) サービス提供時における留意事項

身体拘束を行う必要性を生じさせない為に、日常的に以下のことに取り組みます。

- ① 利用者主体の行動・尊厳ある生活環境の保持に努めます。
- ② 言葉や対応等で、利用者の精神的自由を妨げないよう努めます。
- ③ 利用者の思いをくみ取り、利用者の意向に沿ったサービスを提供し、他職種間で個々に応じた丁寧な対応をします。

- ④ 利用者の安全を確保する観点から、利用者の自由（身体的・精神的）を安易に妨げるような行為は行いません。万が一、やむを得ず安全確保を優先する場合は、身体拘束適正化委員会において検討します。
- ⑤ 「やむを得ない」と拘束に準ずる行為を行っていないか、常に振り返りながら利用者に主体的な生活をしていただける様に努めます。

(3) 利用者・家族への説明

利用者の人権を尊重し、安心してサービスを利用していただくため、サービス契約時に法人の方針を説明します。サービス事業所は利用者及び家族の生活に対する意向を確認し、支援の方向性を提案することで、身体拘束廃止に向けた取り組みについて、理解と協力を得られるように努めます。

3 身体拘束適正化に向けた体制

(1) 身体拘束適正化委員会の設置

当法人では、身体拘束適正化に向けて身体拘束適正化委員会を設置します。

① 設置目的

事業所内等での身体拘束適正化に向けての現状把握及び改善についての検討
身体拘束を実施せざるを得ない場合の検討及び手続き
身体拘束を実施した場合の解除の検討
身体拘束適正化に関する職員全体への指導

② 身体拘束適正化委員会の構成員

- ・管理者
 - 委員会の開催
 - 委員会の総括責任者
- ・サービス管理責任者
 - 身体拘束適正化対策の担当者
- ・相談支援専門員
 - 家族や関係機関との連携
 - 身体拘束適正化対策の助言、サポート
- ・その他、施設長が必要と認めた職員
 - 身体拘束適正化対策の実施

③ 身体拘束適正化委員会の開催

年に1回定期開催します。
必要時に随時開催します。

4 やむを得ず身体拘束を行う場合の対応

(1) 禁止されるべき身体拘束の具体的な行為

当法人における身体拘束にあたる具体的行為は次のとおりです。

- ① 車いすやベッド等に縛り付ける。
 - ② 手指の機能を制限するために、ミトン型の手袋を付ける。
 - ③ 行動を制限するために介護衣（つなぎ服）を着せる。
 - ④ 支援者が自分の体で利用者を押さえつけて行動を制限する。
 - ⑤ 行動を落ち着かせるために、向精神薬を過剰に服用させる。
 - ⑥ 自分の意志で開けることができない居室等に隔離する。
- (2) やむを得ず身体拘束を行わなければならない場合の手順

本人又は他の利用者の生命又は身体を保護する為の措置として、緊急やむを得ず身体拘束を行わなければならない場合は、以下の手順に従って実施します。

① 身体拘束適正化委員会の実施

緊急やむを得ない状況になった場合、身体拘束適正化委員会を中心として、必要な職員が集まり、拘束による利用者の心身の損害や拘束をしない場合のリスクについて検討し、身体拘束を行うことを選択する前に、①切迫性②非代替性③一時性の3要素のすべてを満たしているかどうかについて検討・確認をします。

要件を検討・確認した上で、身体拘束を行うことを選択した場合は、拘束の方法、場所、時間帯、期間等について検討し、本人・家族に対する説明書を作成します。

また、廃止に向けた取り組み改善の検討会を早急に行い実施に努めます。

② 利用者本人や家族に対しての説明

身体拘束の内容・目的・理由・拘束時間又は時間帯・期間・場所・解除に向けた取り組み方法を詳細に説明し、十分な理解が得られるように努めます。

また、身体拘束の同意期限を越え、なお拘束を必要とする場合については、事前に利用者・家族等と行っている内容と今後の方向性、利用者の状態などを説明し、同意を得た上で実施します。

③ 記録と再検討

法律上、身体拘束に関する記録は義務づけられており、その様子・心身の状況・やむを得なかった理由及び経過、解除に向けての取り組み方法などを記録します。また当該記録をもとに身体拘束の早期解除に向けて、拘束の必要性や方法を逐次検討していきます。記録は5年間保存し、要望があれば提示できるものとします。

④ 拘束の解除

③の記録と再検討の結果、身体拘束を継続する必要性がなくなった場合は、速やかに身体拘束を解除し、その旨を利用者・家族に報告します。

4 身体拘束適正化のための職員教育・研修

支援に関わるすべての職員に対して、身体拘束適正化と人権を尊重した支援の励行に

ついて職員教育を行います。

- ① 定期的な研修（年1回）の実施
- ② 新任者に対する身体拘束適正化研修の実施
- ③ その他必要な教育・研修の実施

5 利用者等に対する指針の閲覧

この指針は、利用者・家族等に身体拘束適正化への理解と協力を得るため、法人ホームページに掲載を行い、積極的な閲覧の推進に努めます。

附 則

この指針は、令和4年4月1日より適用する。